互いに愛し合う　　ヨハネ 13:31～35

主イエスは、弟子たちに向かって、「あなたがたに新しい戒めを与える」34 節とおっしゃいました。「戒め」と言うのは、私たちが生きていく上での指針となるものです。この戒めは、「新しい戒め」と言われているように、当時、語られていた戒めとは異なります。何よりも主イエス・キリストが与えて下さる戒めです。では主イエスが語る「新しい戒め」とはどのようなものなのでしょうか？主イエスは、それは、「互いに愛し合うことです」とおっしゃるのです。それを聞くとちょっとがっかりされる方がおられるかも知れません。新しいと言うから、どんな斬新な言葉が出てくると思っていたら結構ありふれたフレーズです。吉本流にするなら「ガクッ」という感じでしょうか。確かに、「互いに愛し合う」と言うことは、わざわざ聖書を読まなくてもどこかで耳にすることです。そう考えると主イエスがここでお語りになる「互いに愛し合いなさい」と言う戒めの、何が新しいというのでしょうか？　今日はそのことをご一緒に考えてゆきたいと思います。

１．愛することは神の命令

互いに仲良くしましょうね。お互いに愛し合いましょうね。といった言葉を聞いて、否定する人は誰もいません。それはとても聞き心地の良いことばです。しかし、「あなたは互いに仲良くしなければならない」「互いに愛し合わなければならない」ということばを聞くと私たちは窮屈さを感じたり、そこまで厳しくしなくても良いのにと思ってしまいます。当然です。主イエスが新しい戒めとして「互いに愛し合いなさい」と言われたのは「愛することは神の命令である」という意味です。命令であるなら、それへの応答はそれに従うか、従わないかのどちらかです。そして従うためには自らの意志や決心、決断が必要とされます。これはアマチュアとプロフェッショナルの違いとも言えます。アマチュアという言葉は「好きである」、「好みである」というラテン語のアマトールから来て愛好家を意味しています。好きだからそれをしている。自分の好みだから続ける。これはこれで良いわけですが逆に嫌いになったらしなくても良い、止めてしまっても良いというわけです。しかし、プロフェッショナル（専門家）は好き嫌いではなく、与えられた任務を最後までやり切って形にすることが求められます。昨日は気分が良いから仕事をした。今日は気分が良くないから仕事を辞める、そんなわけには行きません。「人を愛すること」においても主イエスは戒め、命令として愛し合いなさいとおっしゃいます。たとえその気にならなくとも、また愛しにくい人であっても、愛する必要があるのですと言われるのです。夜中に何度も起き上がって赤ちゃんの世話をする母親のイメージでも考えられます。それは義務でもなければ思いつきでもありません。それは子供を思う本物の愛ですね。その愛で私たちは育てられてきたのです。主イエスは「愛する」ということがロマンチックな関係や相性の良し悪しの問題ではないと言われました。ある人は「愛とは信仰と行いの結合によって生まれる一つの敬虔な行動」と定義づけました。そして聖書はもしあなたが主イエスを愛しているのであれば、あなたは彼の命令に従うはずだと言っています。

〝もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。〞

ヨハネ 14 章 15 節

〝わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。〞

ヨハネ 15 章 14 節

〝神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。〞

ヨハネ第一　5 章 3 節

主イエスがこのように言われていますので少なくとも私達の心には葛藤が生まれることと思います。「主

イエスは愛しなさい」と言われる。しかし、私はそれが出来ない。どうしたら良いのでしょうか？と。簡単に神様が何と言おうと私が嫌いなことは嫌いです。とはなりません。

2.愛することは成長すること

主イエスは「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」34 節と言われました。主イエスは抽象的に愛を教えようとしているのではありません。主イエスが、どのような状況の中で、この戒めをお語りになったかを見ますと 13 章の 1 －20 節には、主イエスが、最後の晩餐の席で、弟子たちの足をお洗いになったことが記されています。人の前でひざまずいてその人の足を洗うと言うのは当時は奴隷の仕事であり、社会的に最低な仕事とされていました。そのように主イエスは、自ら僕となって仕えることを通して愛をお示しになったのです。僕のような気持になってとか遜ってということではなく実際それをしてくださったのです。この出来事は、はっきりと、この後、主イエスが赴く十字架の出来事へとつながってゆきます。主イエスが僕となって下さったと言うことは、神の一人子でありながら、十字架で罪を担って死んでくださったと言うことにこそ完全に示されているからです。つまり、主イエスは、この時、まだ、主イエスの十字架のことが分からない弟子たちに向かって、足を洗うと言うことを通して、人々に仕える神の愛を教えておられたのです。しかも、ただ、神の愛を示すだけでなく、主イエスによって示される神の愛に、弟子たちが具体的に生かされるとはどのようなことなのかを「足を洗う」と言う姿を通してお示しになられたのです。クリスチャンとはキリストに従う者、ついてゆく者という意味です。それはどこに向かうかと言うなら主イエスが十字架に向かっておられるわけですからキリストのしもべとして十字架につながってゆきます。ですからクリスチャンとなってこの世界で目立とう、一旗あげようという思いがあるなら今一度自分の前にイエス様がおられるのかどうか見た方が良いかもしれません。この後には続けてペテロが主イエスを裏切る予告が出てきます。ペテロは主イエスの話を聞いた後ですから主イエスを愛する気持ちを強く持っています。「死ぬのも怖くない」とペテロは言います。しかし結果的に最悪の形でペテロは主イエスを否定し、逃げてしまいます。それでも主イエスはペテロや弟子たちを愛し続けられました。主イエスの「わたしがあなたがたを愛したように」の愛はそれほど深いものなのです。ですから私たちは、主イエスの愛が示されている十字架への道を見る時、先ず見なければならないのは自分の力で主を愛し、従おうとする時に自分自身は主イエスを裏切る者でしかないと言う現実の姿であることを知らされます。しかし、そのような、愛に生き得ない人間の現実の直中で、主イエスが愛に生きてくださったことを知らされる時に、その愛に促されて、そこで示される愛に生きる者とされていくのです。

主イエスは弟子たちの足をすべて洗い終わった後、12～15 節で「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。13, あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。14, それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。15, わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」と言われた後「17, あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」とおっしゃいました。最後のことばから主イエスも弟子たちが互いに足を洗うことはそうすんなりと出来ることではないことを知っておられます。しかし、それをする時に祝福されるというのです。主イエスの新しい戒めはやってみる時に祝福されるのです。

「互いに愛し合いなさい」という命令に従うためには何よりも先ず人間関係が築かれる必要がありま

す。孤立したまま、一人ではキリストの命令に従うことは出来ません。しかし、人間関係を持ちながら生きてゆくと人間関係について持っている理想的な姿は大抵、打ち砕かれます。神様は一人一人をユニークな存在として造られ、一人一人が異なった考えや必要を持っていることをご存知です。ですからそういった者が共に集まるとそこに様々な葛藤や衝突が起こるということもご存知です。しかし、そういったものによって私たちを成長させるということもまた神の御心なのです。それは決して簡単なことではありません。自分のことを棚に上げて、他人の罪を裁こうとするのが私たちの常です。又、自分に対する隣人の罪を赦すことはなかなか出来ません。罪を赦す愛に生きると言うことは、私たちの力で成し遂げられるものではありません。ただ、主イエスが自ら愛を示し、私たちを愛しつつ、語られる戒めを聞き、実行してゆく中で実現して行くのです。それはあなたにとって足を洗うことに代わって例えば一言「すいません」と謝ることかもしれません。あるいは「ありがとうございます」と感謝の意を表すことかも知れません。また握りしめている憎しみや敵意を「赦します」といって手を開いて解き放つことかもしれません。とにかく「わたしがあなたがたを愛したように」、つまり、キリストが示して下さった愛に基づいて、互いに愛し合う。ここに、主イエスの戒めの新しさがあるのです。

3.神を愛するとは人を愛すること

私の周りにいる人々は私がその人を受け入れようと受け入れまいと、神様にとっては大切な存在です。しかも私と同じぐらい大切な存在です。神様が愛され、大切とされている存在を私が軽んじるということは結局、私は神様を軽んじていることになります。

″神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。″ヨハネ第一 4 章 20 節

もちろん、神様はすんなりと目に見える人を私たちが愛し難いということもご存知です。ただ聖書が示す愛の本質とは自分がその人を愛せるか、愛せないかと自問自答することよりも、どれだけ自分自身を捧げているかということであると教えています。

″また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。″エペソ人への手紙　5 章 2 節

（別訳）キリストの模範にならって、他人への思いやりに満ちあふれていなさい。キリストの愛は、あなたがたの罪を取り除くために、ご自身をいけにえとして神に捧げるほど深かったのです。

自分の必要を横において兄弟姉妹の必要を満たすことに心を砕きなさいと勧められています。自分のことを聞いてもらおうとするだけでなく、人のことにも耳を傾けたいと思うのです。

そして目標とするのは神が私を見てくださっているように、ほかの人々を見ることが出来るようになるということです。パウロも″ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。″

コリント第二　5 章 16 節と言っています。

主イエスの新しい戒め「互いに愛し合う」ことを学んできました。主イエスの戒めの新しさとは、今まで聞いたことがないような教えと言う意味での新しさではありません。しかし私たちの戒めに対する概念を根本から覆し、私たちの生き方に根本的な変化をもたらすような、新しさを持った戒めなのです。その神の戒めに従い、応答し、変えられ続けて行く道を示す全く新しい戒めなのです。信じて従うなら変えられる戒めです。互いに愛し合う群れとなることを目指しましょう。